

とある魔術と科学の奇妙な冒険 ～絆の物語～

かじもこ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

エジプトから帰国した承太郎は突如学園都市で暮らすことになる！そんな承太郎の学園都市の日常？を描くSSです。

もちろんタイトルどおり主人公は承太郎です。禁書目録と超電磁砲のストーリーをミックスにしたいと考えています。

Reがついてるのは訂正したものです。初めて読む方は気にせず読んでください！

これまで読んでくださってる方は内容が結構変わってるのでお気をつけ下さい！

第1部は全てリニューアルする予定です！

12話はもうちよつとお待ちくださいm(´▽`)m

ただいまの最新話はRe4話です

目次

第1部 禁書目録編

Re1話	冒険の始まり	1
Re2話	学園都市その1	5
Re2話	学園都市その2	9
Re3話	超電磁砲	15
Re4話	御坂美琴	19
5話	虚空爆破事件	25
6話	禁書目録（前編）	30
6話	禁書目録（後編）	35
7話	ステイルIIマグヌス	40
8話	魔女狩りの王（イノケンティウス）	44
9話	警告	48
10話	幻想殺し	53
第2部 妹達編		
11話	御坂妹	62

第1部 禁書目録編

Re1話 冒険の始まり

1987年。D I Oと承太郎達の戦いより2年前、エジプトD I Oの館

「D I O様、イギリス清教より客人が来ております」

「ふむ、通せ」

イギリス清教の噂は聞いていたが、まさか直々に訪ねてくるとはさすがのD I Oも驚きを隠せずにいた。

部下に通させるとそこには金髪でイギリスの貴族の服を着た少女がいた。

「あなたがデイオ・ブランドーですわね？ 私はイギリス清教の代表、ローラースチュアートと申します」

「このD I Oに何の用だ？」

「吸血鬼でありながら、最強のスタンド使いでもある貴方に協力してほしいのです。学園都市の『あの男』を倒すために」

「その男を倒してこのD I Oに何か特でもあるというのか？」

「ええ。彼は・・・」

「分かった、協力しよう。ただし、ジョースターの血統のものを始末してからだな」

「ええ、私達も出来る限り協力するわ」

それから2年の時が過ぎ、西暦1989年。

日本、東京都独立区『学園都市』。人口は230万人、周囲を高さ1

0メートル以上の壁で囲まれており、外とは完全に遮断されている。10年ほど前から東京の西部を開拓して、できた街であり、その名の通り人口の約5割が学生や教師で構成されている。そのため、様々な分野での勉強ができる場となっている。また、学園都市は世界中から最新の技術が集められ研究をする場としても知られており、外の世界ではガラケーやらバブルやらで盛り上がっている中、既に学園都市内ではスマートフォンが普及していたりと技術は40年以上の差がある。

またこの学生は、あるものを使うことができる。

『超能力』

この学園都市では学生の脳を『開発』『訓練』し、たくさんの超能力者を生み出している。しかし、それはある組織へ対抗するためとの噂もある。

そして、この学園都市を舞台に2人の男による奇妙な冒険が始まるうとしていた。

1989年6月20日

承太郎は4年目の高校生活を送っていた。DIOとの戦いとの影響で出席日数が足りなくなってしまい2回目の留年となってしまう。1回目は一昨年、担任教師への暴行で謹慎となり、結果出席日数などから留年となっていたため、3回目の高校2年生である。

今年こそは進級するために承太郎は勉強に励んでいた。

いつも通り授業を一通り受けて帰宅する承太郎。承太郎はふと考え事をしていた。エジプトから帰ってからよく言われることがある。

「承太郎、なんか変わったね」

「数ヶ月前とはまるで別人みたいだけどなんかあったの？」

俺が変わった？まあ、あんなことがあれば変わらないわけがないか。

母親を助けるため、打倒DIOを掲げて戦ったあの旅。出会い、そして別れ。承太郎自身は気がついてはいないが、少年から大人へと成

長していたのであった。

「やれやれ、とりあえず家に帰って今日の復習でもしておくか」

そんなことを考えながら帰宅すると懐かしい人物が家を訪れていた。

「おー、承太郎！久しぶりじゃなく」

「なんだ、じじいか。ずいぶんた久しぶりだな」

承太郎の祖父、ジョセフ・ジョースターである。思い返してみればエジプトの旅以来である。久しぶりに会えて嬉しい反面。また何か起きたのではないかという気もした。

「承太郎。突然ですまないが、ちよつと居間まで来てくれ。話したいことがある」

「なんだ？矢でも見つかったのか？」

「いや、それよりもヤバい話じゃ。すまんが急いでくれ」

「ああ、わかった」

そして数分後、承太郎が居間に向かうとそこにはジョセフだけでなく、承太郎の母であるホリイもいたのであった。

「承太郎そこに座ってくれ」

「ああ。それでじじい、話つてのはなんだ？」

「ふむ、承太郎。お前、昔話した柱の男のこと覚えているか？」

「確か、じじいが昔戦った石仮面を作った奴らだろ？」

「ああそうじゃ。その件でちとまずいことになってな」

ジョセフが頭を抱え込む。これは相当ヤバいことらしい。ホリイが心配になりジョセフに話しかける。

「パパ！大丈夫？」

「ああ、すまん。大丈夫じゃ。巻き込んでしまつてすまんホリイ」

「おいじじい！早くそのヤバい話つて奴を話しやがれ！」

「ああ、わかった」

ジョセフの話によると、SPW財団の研究所に嚴重に保管されていた柱の男の唯一の生き残り『サンタナ』、そして未知の力を引き出す仮面『石仮面』が何者かによって盗まれてしまったという。そして必死に捜索したところ犯人は学園都市の関係者であった。柱の男と石仮

面奪還のため学園都市に潜入を試みたが学園都市の暗部などに邪魔をされ奪還は困難であった。そこで承太郎に白羽の矢が立ったのである。承太郎を学生として入校させ、柱の男と石仮面を調査するということであつた。

「なるほど。つまり俺に学園都市で柱の男と石仮面を捜索してほしい、というわけか。」

「そうじゃ。承太郎引き受けてくれるか？」

「俺はいいが、能力とかはどうするんだ？ スタンド使いつて普通に言つてもいいのか？」

「その辺は大丈夫じゃ、お前は小さい頃半年だけ学園都市で能力開発を受けた『念力使い』ということにされるらしい。ただごくわずかな人はスタンドを見ることが出来るらしいからな、気をつけるんじゃないぞ」

「やれやれ、これじゃあNOとは言えねえじゃあねえか。行つてやるよ学園都市に。すまねえなお袋、勝手に決めちまつて」

「全然大丈夫よ！ただ、ちゃんと帰つてくるんだよ！」

「ああ、勿論だ。じじいはどうするんだ？」

「ワシは学園都市の奴らに顔がバレてしまつて居る可能性があるからついていくことはできんが、ワシのスタンド、ハーミットパールの念写で得た情報は随時報告していく」

「頼りにしてるぜ、じじい」

「ふふふ、SPW財団にジョセフ・ジョースター、空条承太郎か。相手にして不足はないな」

培養液の水槽の中にいる長髪の男性はかすかに笑みを浮かべていた。

To be continued↓

Re2話 学園都市その1

1989年7月2日（日曜日） 午前9時

俺の名は上条当麻。学園都市で暮らす、ごく普通の高校2年生である。俺は今とても急いでいる。え？なぜ急いでるかって？

寝坊しちまったからだよ!!？

留年をかけた補習があるのにもかかわらず寝坊しちまったー！ヤバイ！担任の小萌先生に怒られちまう！

そんなことを考えながら街中のビル街を走り上条は全力で学校へと向かっていたが・・・

「ちよつとあんた待ちなさい！」

髪は茶色のショート。スカートは膝上までまくり下には短パンを履いていかにもイマドキの女子中学生に声をかけられた。

彼女の名は御坂美琴。事あるごとに漬け込んで俺に絡んでくるちよつと厄介な少女である。ただの女子中学生ならまだ可愛いのが、彼女はこの学園都市の最強の『電撃使い』。Level5のあの御坂美琴である。1ヶ月前に彼女が不良に絡まれているのを助けてから常に絡んでくる。しかもかなりのツンデレである。

おつとこんなことしてる場合じゃない！補習補習！

「御坂、悪いな！上条さんは今日はちよつと用事があるから逃げさせてもらうよ」

「あつ！ちよつと待ちなさいよー！」

上条と御坂の命がけの追いかっこが始まった。捕まれば彼女に人気のないところに連れていかれ電撃を飛ばしてくる。

「みさかく、勘弁してくれ！補習に間に合わなくなっちゃう！」

「そう言ってまた逃げる気なんでしょ！絶対に逃さないわよ！」

「不幸だ〜！」

そう、この上条さんとはにかく『不幸』なのである

なんとか御坂きら逃げ切り学校へと到着した上条。だったが・・・

「しまった！部屋に鍵をかけるのと今日提出のプリント忘れてきちゃったー！」

すぐさま職員室に向かい、担任の小萌に事情を説明する上条。

「すみません小萌先生！こういうことがあったので急いで取りに行つてきます！」

「上条ちゃん？特別個別補習に遅れた上にまだ家に戻るってどういうことなのですか？このままでは留年どころか退学になってしまいうのですよ？」

小萌は呆れた様子で答えた。彼女は担任の月詠小萌。上条当麻のクラスの担任である。見た目は小学生ほどと小さいもののお酒も飲むし、車も運転するれっきとした大人である。その小ささから生徒から舐められてしまいそうでもあるが熱血漢な性格なゆえ、生徒たちからも愛される先生である。

「上条ちゃん？聞いていますか？」

「あつ、はい。すみません・・・」

「このまま取りに戻ればお昼頃からなのです。先生は転校生とお話ししなければならぬので補習は黄泉川先生にお願いしておきますね」

「えっ！黄泉川先生ですか？！」

黄泉川愛穂。スパルタで有名な隣のクラスの担任である。また、彼女は体育担当教師でありまたアンチスキルでもある。

学園都市には警察のような2種類組織がある。一つ目は学生のみで構成されたジャッジメント。そして教師など大人で構成されたアンチスキル。この2ちの組織が学園都市の治安を守っているのである。そしてこの黄泉川先生はアンチスキルに所属しており、隊長を務めるほどの腕である。

「なんだ上条。私が担当でなんか不満があるじゃんか？」

「いえ、別に」

「じゃあ早く取りに戻るじゃんよ」

「は、はいー！」

上条は黄泉川の威圧により全速力で家に戻った。

上条は全速力で走った。突然の突風で顔面に看板が飛んできたり乗ろうとしたバスが目の前で発進したり財布を学校に忘れてきてもなお走り続けた。

そしてようやく学校へと戻ってきた時には小萌の予想通り12時を少し過ぎた辺りで到着した。

しかし、ようやく着いたものの、これから地獄の補習が待っていると考えると足取りが重かった。昼ご飯も食べてもいなかったが黄泉川先生も当然、待つているのだから食べていないだろう。

上条は黄泉川先生が待つ教室まで全力で向かった。理由は分からないが手に筆箱を持って。

しかし、昇降口へ入り廊下を全力疾走で走り始めようとした時、目の前に巨大な黒い壁が現れた。

やばい！ぶつかる！

そんなことを考えていたがすでに手遅れであり、上条はその大きな黒い壁にぶつかりずっこけて手に持っていた筆箱の中身を盛大にぶちまけたはずだったのだが……

気がついたら何事もなかったかのように立っていた。

気が動転していたので気がつかなかったがどうやらさつきぶつかったのは壁ではなく男であった。身長は190センチもある巨大な男が学ランを着て立っていたのである。

「おい、大丈夫か？走るならちゃんと前を見て走れ」

「ああ、ありがとう」

のちのち分かった事だが、彼の名は空条承太郎。今日、学園都市に引越してきた転校生である。

上条当麻、そして空条承太郎。この2人の出会った事により、運命の歯車は動き出すのであった。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
↓

Re2話 学園都市その2

1989年7月2日（日曜日）午前11時

承太郎は今、学園都市へと向かうタクシーの中に居た。しかし、承太郎はどこかソワソワしていた。それもそうである。元々6月の末には転校する予定であったのだが、手続きなどは全て

「このジョセフ・ジョースターに任せておけ！」

と言うのでジョセフ全て任せていた。しかしそれは間違いであった……。先週あまりに手続きに時間がかかるのでジョセフに聞いてみたところ……

「しまった！すっかり忘れておった！すまん！」

その直後、承太郎とホリイの様子を見て逃げるんだよおおおと脱走しようとしたジョセフの顔面に2人の鉄拳が飛んできた。なんだかんだあったが、なんとか終わらせる事が出来た。

こんな事もあり、本当に大丈夫なのかと承太郎は内心とても不安であった。

「お客さーん学園都市にもうすぐ入りますが身分証や証明書の準備は大丈夫ですかー？」

「ああ、問題ないぜ」

心の準備は全然大丈夫ではなかったが。

そして検問所。かなり嚴重で、例えるなら要塞のようだ。そんなことを考えていると、検問のアンチスキルに声をかけられた。

「学園都市は初めてですか？」

「いや、ガキの頃半年ぐらい居たことがあるぜ」

「分かりました。では身分証と転校証明書を拝見します」

こんなものが本当に使える不安であったが、まあ使えなかったらじじいにもう一度鉄拳を喰らわすまでだ。などと考えていた。

「えー、空条承太郎さんですね、問題ないです。どうぞー！」

以外とすんなり学園都市へ入ることができた。そして承太郎

は、ふと街を眺めてみた。

「これが学園都市か、確かに外より30か40年年ぐらいの技術の差があるな」

街の中心部付近にはニュースでしかみたことがなかった軌道エレベーターがあった。

「こんな所で驚いてたらきりがありませんよーお客さん。学園都市じゃあ能力者や警備ロボ、清掃ロボなんてざらにいますからねー」

こんな所で暮らしていくと考えるとなぜか自然とため息が出てきた。

それから1時間ぐらいタクシーに揺られ、ようやく承太郎はこれから通う学校に着いた。

今日は日曜日であったので学校にいる生徒は少なかったものの身長と体格から注目の的であった。

「見て見て！あの人マジでかっこいいwww」

「ほんとだ！かっこいいwww」

「あんな人彼氏に欲しいよねwww」

「あんな彼氏いるじゃんwww」

ワイワイガヤガヤ

こうなる事はある程度、承太郎も予想済みではあったがやはり鬱陶しいことには変わりはなかった。

「やれやれ、まあとりあえず担任に挨拶だけして今日は帰るとするか」
荷物の整理はスタープラチナを使えば1時間で終わるから今日はゆっくりできるだろうと、承太郎は思っていた。

校舎に入った承太郎は案内書を見ながら、とりあえず職員室を目指していた。

「職員室は1階の奥の方か」

「あー、補習かー」

『』

職員室に向かおうと歩き出した時に、横から出てきた学生と衝突した。

もちろん体格差から吹っ飛ぶのは承太郎ではないのは当然であった。ぶつかった衝撃で彼の手に持っていた筆箱の中身をぶちまけながら転ぶかと思われたが次の瞬間、彼は何事も無かったかのように承太郎の前に立っていた。

「おい、大丈夫か？ちゃんと前を見て歩け」

こつちもよそ見してたから承太郎も悪くないとは言えなかったが。

「あ、ありがとうございます」

承太郎は倒れた学生を起こすために手を貸した。しかし、その学生が承太郎の手を握った瞬間、とても不可思議なことが起きた。

彼の右手に触れた瞬間何とも言えない『違和感』を感じた。まるで普通なら出会うことない2人が、出会ってしまったような感覚に襲われていた。

それは上条も同じだった。彼に触れた瞬間幻想殺しが発動して、何とも言えない違和感に襲われていた。

「デメエ、何者だ？」

「お前こそ何者なんだ？」

2人が手を握ったまま警戒し合い膠着状態が続いていた中、小萌が割って入ってきた。

「上条ちゃん？やっとなついたのでですね。それにしても男2人で昼間からラブコメなのですか？」

そこには小学生ほどの大きさの少女がいた。なぜこんな小さい子が高校にいるのか疑問に思った時、承太郎の手を握っていた男は手を急いで離し、少女の元へと向かった。

「先生！お待たせしました。この上条当麻、ちゃんとお昼まで戻って来ました！」

「お疲れなのです。黄泉川先生が待ってますよ」

「あの？先生、俺お昼ご飯食べてないんですけど・・・」

そんな様子を見て承太郎は2つの疑問が思い浮かんだ。まず1つ目は、なんでこんなところに小学生がいるのかということである。承太郎は高校に来たはずだが、明らかに目の前にいるのは先生の

真似をしている小学生である。そしてもう一つは、さつきからこの男が話している小学生の『小萌』という名前と承太郎の担任の名前が同じということである。

しかし、早く帰りたいためそんな悩みは一瞬で消え去った。

「おい、テエーら。ふざけてないでさつきと補修とやらに行け、鬱陶しいぞ」

「先生に向かってテエーらとは何事ですか！失礼にもほどがあります！」

「分かった分かった」

「あー！流しましたね〜?!？」

「大体、なんで小学生が高校なんかにいるんだ？」

「私は小学生じゃないのです〜！」

小萌と言い合いになる承太郎。するとさつき先生と話していた男が承太郎の肩をつつき、小声で声をかける。

『おい、おい！』

「なんだ？」

『あの人、見た目は小さいけど本当に先生だぞ』

「本当か？」

『ああ、小萌先生は小学生みたいな見た目してるけど、酒を普通に飲めるような年だぞ』

承太郎は再びその先生とやらに目を向ける。やはり小学生にしか見えない。

そんなことをしていると騒ぎを聞きつけた黄泉川がやって来た。

「よおー、小萌先生。どうしたじゃんよ？」

「その大男に小学生にしか見えないって言われたのです〜！」

「確かにそれは一理あるな」

「そんな〜、黄泉川先生〜」

小萌と黄泉川は話し始める。しかし、よく小萌を見ると確かに服も大人っぽいのを着ている。とりあえず、このままだと話が進まないで、小萌は学園都市の能力で小さいままということに割り切った。

それから承太郎と小萌の間で一悶着あったものの、黄泉川の仲介で

なんとか収まり、承太郎は小萌から学校生活の説明、上条は補修へと向かった。

それから数時間、承太郎は小萌から連絡や学園都市でのルール、能力などについてみっちり話された。話の途中で「不幸だー」などという声が隣の教室から聞こえたが気にしなかった。そして話が終わったら能力検査などが行われた。結果を見ると承太郎は「念力使用」のレベル3ということであった。

承太郎はふと外を見ると、もう夕方になっていた。

「小萌、すまねえがもうそろそろ家に帰りたいんだが」

「先生をちゃんどつけるのですー！ま、確かに明日から学校ですので今日はこの辺にしておくのです」

そう言われ、隣の部屋に承太郎は連れていかれた。そこには白く燃え尽きた上条の姿と、ニヤニヤする黄泉川の姿があった。

教室に入って来た承太郎と小萌の様子を見て黄泉川がこちらに歩いて来た。

「そういえばさつきは挨拶ができなかったな。黄泉川だ。主に体育を教えるからよろしく」

「黄泉川先生かよろしく」

「なんで黄泉川先生には付けるのに私には先生を付けないのですかー！」

「好かれてるんだよ、な？承太郎」

「やれやれだぜ」

すると突然、小萌が何か思いました様子で上条の元へ向かった。

「上条ちゃん起きるのですよー！」

「んー、るーとさんはひとなみにおごれるーとは・・・」

「上条ちゃん！」

「うわっ！小萌先生、どうしたんですか？？」

「上条ちゃんと空条ちゃんは隣の部屋同士なので仲良くするのですよー」

「えっ！そうなんですか！」

確かに上条の隣の部屋は4月に卒業したため、片方は開いたままに

なっってはいた。

「なるほど、上条当麻です！よろしく」

「空条承太郎だ。よろしく」

「えっと承太郎さんでいいかな」

「承太郎で問題ないぜ」

「そうか、承太郎。改めてよろしくな！」

承太郎はなぜかわからないが上条と気が合いそうな気がした。おそらく上条の雰囲気かDIOとの戦いで死んだ花京院や、アブドウルに似ていたからかもしれない。

それは上条も同じであった。今まで自分の不幸体質のせいもあって、あまり人は信用できなかったがこの承太郎は信用できる気がした。

「それじゃあ、俺たちはこれで失礼します」

「気をつけて帰るのですよー！」

「お疲れじゃん！」

帰り道、承太郎と上条は晩ご飯の材料を買うためにスーパーに寄り、そこから寮への帰宅の途に着いた。だがその帰り道、事件が起きた。

「あんた、見つけたわよ！今度こそ決着を・・・でかつ！あんた誰？」

突然顔も知らない少女に声をかけられたというか喧嘩を売られた。茶色の髪に制服のミニスカートを履いた今時の学生だ。しかし、この少女は承太郎を見てかなり驚いた様子であった。

「上条、誰だこのガキは？誰か知らんがこんなガキに用は・・・」

承太郎が言いかけた時、上条が必死な様子で止めに来た。

「あー承太郎やめたほうがいい。あのビリビりは・・・」

「ビリビリ言うな！それと、私はガキじゃないー！」

突如承太郎に向かって電撃が放たれた。

To be continued↓

Re3話 超電磁砲

「ビリビリ言うな！それと、私はガキじゃないー！」

御坂はこのチンピラみたいな男にガキと言われたことに腹を立て、承太郎に向けて電撃を放った。勿論、致命傷になるレベルではなく多少の火傷で済む威力である。

「なに、電撃だと!?？」

驚く承太郎。そして御坂は勝利を確信した。

しかし、電撃が承太郎に直撃する直前、不思議なことが起きた。承太郎の後ろから腕のようなもの出てきて、電撃を弾いたのである。

腕自体は見えなかったが、この少女は高レベルの電撃使いであることから無意識のうちに微量の電気によるレーダーを作っている。そのレーダーは確かに感知した。承太郎の背中から出る奇妙な腕を。

「やれやれ、とんでもねえ威力だぜ。俺じゃあなかつたらただじゃあ済まなかったな」

「あんた、一体何者なの・・・？」

「空条承太郎、今日転校して来たただの高校生だ」

御坂は信じられなかった、なぜならこの攻撃を正々堂々と受けてピンピンしていたのは、承太郎の隣に居る上条しかいなかったからだ。

しかし、承太郎も驚いていた、予想以上の彼女のパワーに。そして先ほどの攻撃からスタンドに対して、この超能力は有効であるという事が分かった。さつき電撃を弾いた右手がビリビリしていた。

「なあ、上条このガキは一体何者だ？お前のその様子だと知っているようだが」

上条はさつき「あ！承太郎やめたほうがいい。あのビリビリは・・・」と言った。つまり上条は、この少女の事がある程度知っているということだ。

「ああ、よく知ってるぜ。あのビリビリは御坂美琴。学園都市最強の電撃使いでレベル5の第3位つてとこだ」

上条はこの少女の事をよく知っていた。なぜなら上条が持つ能力

の影響でここ数週間、この少女に追われていたからだ。

「さて、上条。レベル5つてのは学園都市最強の能力者だろ？その第3位つてことは学園都市で3番目に強いのか？」

「まあ、そういうことだ」

転校初日でまさか第3位とご対面とは承太郎は考えてもおらず、驚きであった。

「話は済んだ？」

御坂はいつまで待たせるんだとばかりに聞いてきた。

「ああ済んだぜ、御坂美琴」

承太郎は考えた。先ほどの感覚から、まともにこの少女と戦って負けることはないものの、タダでは済まないであろうと。

「それじゃあ今度は、あんたの能力について教えてもらってもいいかしら？」

御坂は確信していた。この大男の能力は学園都市の物ではないと。「俺の能力か？念力使いのレベル3とでも言ったところだ」

勿論ここではスタンド使用とは言えないのでこう言うしかなかった。

「念力使いねー、じゃあさつき背中から出てきた腕はなんなの？」

とほけることは分かってたので御坂には考えがあった。

「なんのことだ？」

こいつ、スタンドを感じる事ができるのか！厄介だな。

「まあこうすれば能力を使わなければならぬよね？」

御坂はコインを取り出し構えた。

「まさか!!?ビリビリやめろー!」

上条が叫ぶが遅かった。

「いっけええええええ」

御坂の手から超高速の電撃を帯びたコインが承太郎に向かう。

「くっ!スタープラチナ・ザ・ワールド」

御坂はあの大男がそう叫んだように聞こえた。そして次の瞬間コインはあらゆる方向へと飛んで行った。

「やれやれ、あれをまともに受けてたら大怪我するところだったぜ」

承太郎は5秒だけ時間を止めコインを人のいない方へと蹴り飛ばしたのである。

「え、嘘、手加減したとは言えあれを弾くなんて」

やはりただ者ではなかった。しかし驚いていたのは御坂だけではなかった。

「承太郎、今なにをしたんだ・・・？」

上条は承太郎が叫んだ直後不思議な感覚を感じた。自分と承太郎以外のすべての世界が、止まって見えた。いや、確実に止まっていた。啞然として動けなかったが動こうとすれば動くことができた。

「今なんか世界が止まってるように見えたけど・・・」

「なに！まさか上条、今感じたのかあれを」

信じられなかった。なぜならこの時を止める能力を感じることでできるのは承太郎の知る限りでは承太郎とDIOだけであつたからだ。

「そこまでですわー！」

突如、腕章を付けた少女が現れた。

「ジャッジメントですの！あなた方2人を暴行及び恐喝の容疑で拘束します。」

ジャッジメント？ああ、ここの警察の役割をしている奴らか。やれやれ転校初日で拘束か。

「ちよつと待ちな、別に俺らはこいつに暴行なんかしてないんでな。むしろ攻撃されて正当防衛をしたま・・・」

突如彼女が承太郎の前までテレポートしてきた。

「言い訳は署で聞きますわ」

カシヤンと承太郎とおまけに上条も手錠をかけられた。

やれやれ、とんだ免罪だな。まあ訳を話しても聞いてくれないさうだが。しかも問答無用で手錠と来たか。上条はとんだ巻きぞえだな。

「不幸だー！」

「ちよつと待って黒k・・・」

ようやく啞然としていた御坂が口を開いたが黒子に制された。

「お姉様、あれだけ不良にはちよつかいをかけないようにとあれだけ

申しましたのに！お姉様も署に来てもらいますよ」

「いや、ちよつと！黒子ー！」

「やれやれ、突如現れて暴行だの拘束だの全く上条じゃないが不幸としか言いようがないぜ」

承太郎はため息をついた。

それから5分後、ジャツジメントのパトロールカーに乗せられた3人はジャツジメント第177支部へ連行されたのであった。聴取やらなんやらされたが、冤罪であったので謝罪やらなんやらされた。

だが、御坂から逃げるチャンスを見つけられたので逃げることにできたのはラッキーだった。

しかし、家に着いたのは午後8時でろくに休む事ができなかった。ましてや承太郎は荷物の整理すら終わらなかつた。

次に御坂に会ったらどう復讐をするか考えていた2人であった。

T o b e c o n t i n u e d ↓

Re4話 御坂美琴

「ん？朝か。やれやれ、あのビリビリのガキのせいで荷物の整理が結局終わらなかつたじゃあないか」

その後、上条の家にお邪魔し晩ご飯を一緒に食べながら御坂への対処法を考え、その後荷物の整理を全力でしたが結局終わらず、仕方なくシャワーを浴びた後に承太郎はダンボールの上で寝ることにした。だが、ダンボールの上はとても寝心地が悪く、おかげでほとんど寝れず承太郎の機嫌は最強に悪かったのであった。

「あのガキ、絶対に・・・」

そうボヤきつつ承太郎は準備を整え、いつもの学ランを着た。上条を迎えに行くとまだ準備中であつたのでなんとなくテレビを見ていた。

「なるほど、テレビのチャンネルは東京よりチャンネルが1つ多いぐらいであとは同じだな」

ピンポン

「おーい承太郎！準備終わったぞー」

テレビを見ているうちに上条が準備を終えたため承太郎と上条は学校へ向かった。

学校へ向かいながら承太郎と上条は作戦を整え今日の放課後に備えた。

「上条、昨日の作戦はしっかり覚えてるか？」

「ああ、バツチリだ2人とも御坂と1対1で戦って瞬殺して・・・」

承太郎と上条は御坂に対しある作戦があつた。

「でも俺はこの右手があるから大丈夫だけど、承太郎はどうなんだ？まさか昨日のを？」

「まあ、そんな感じだ。それはそうと上条、お前のその右手はなんなんだ？御坂の電撃を消すことが出来れば、俺の時止めも上条に限り無効にすることが出来る」

これは昨日上条との作戦会議の時に上条はこの右手で電撃は無効にできると言っていた。承太郎のスタープラチナの能力を説明した

影響で時間が押してたため、詳しく聞くことが出来なかつたので承太郎は気になっていた。現に昨日はこの能力の影響で白井黒子はテレポートが出来ず応援のジャツチメントのパトロールカーで連行されたのであつた。

「ああ、俺の右手か。この右手は俺にもよく分からないけど、異能の力ならなんでも無効にすることが出来る。だから御坂の電撃も無効にできるし、承太郎の時止めやテレポートも無効に出来たんだと思う」
よく分からないというのは不安であつたが、スタンドも同じく、あまり分からない能力であるから同じようなもんかと承太郎は考えていた。

そうこう話しているうち学校へと到着した。

「そういえば、小萌に教室に行く前に職員室に来いと言われていたな。上条、後でな」

「ああ、また後に教室で」

承太郎は職員室へと向かつた。

ところで上条はさつきから気になっていることがあつた。登校途中からであつたが承太郎へ女子からの視線が半端ではなかつた。しかし、承太郎は当たり前かのようにスルーしていた。こいつ！羨ましい！

その頃、承太郎は職員室に着き、小萌と話をしていた。

「空条ちゃん？黄泉川先生から聞きましたけど初日からジャツジメントのお世話になったのですよね。誤認逮捕とはいえジャツジメントの方に疑われるようなことをしては」

こいつ情報が早いなど承太郎は舌を巻いた。

「ああ、以後気をつけるぜ」

まあ今日も多分ジャツチメントの世話になるだろなと考つつ答えた。

そして始業時間になり、承太郎と小萌は教室へと向かつた。そして小萌が入り

「皆さんおはようございますー！」

『おはようございます』

バラバラではあったが大きな挨拶が聞こえてきた。

「みんな元気ですねー、えーでは今日はまず転校生を紹介したいと思
います」

「先生ー！転校生は女子ですか？」

青髪のピアスが小萌に聞いた。

「変態さんは黙ってるのですよ？」

小萌は笑顔？で答えた。

「はいいいしませんでした。あー小萌先生たまらん」

と興奮した様子で座った。こいつ、本物の変態だな。

「はいでは紹介します。空条承太郎ちゃんですー」

承太郎が教室に入ると歓声が上がった。

「おー！すげー、でけー！」

「ねえちよつとカツコ良くない？」

ザワザワ

「皆さん、静かにー！空条ちゃんが喋れないのですよー！」

小萌の掛け声でみんなが静かになった。よく見ると上条が後ろの
方に座っていた。

「はい、それでは空条ちゃん自己紹介お願いします」

「○○高校より転校してきた空条承太郎だ、よろしく」

承太郎が自己紹介を終えると再び歓声が上がった。

「それじゃ空条ちゃんは上条の隣の席ですね」

承太郎が席に着き、授業が始まった。クラスのみんなとも上条のお
かげですぐに打ち解け、上条の悪友である青髪ピアスや土御門とも仲
良くなったのであった。

そうこうしている間にあっという間に時が過ぎ放課後となった。

「かみやーん、承太郎ー、今日承太郎の転校を記念して4人で飯でも食
いに行かないかー？」

しかし残念ながら承太郎と上条はとある用事があったのだ。

「すまねえ土御門。今日は承太郎と用事があるから行けないんだ」

「そうか、わかったじゃあなー！」

「じゃあなー」

しかし、土御門と青髪ピアスが帰り上条と作戦の確認をしている時、悲劇が起きた。

「上条ちゃん、じゃあ昨日の補習の続きやりますよ?」

まさかの今日も補習があったのだ。

「先生ちよつと今日は用事が・・・」

「上条ちゃん。このまま留年確定ですよ?」

小萌が真顔で答えた。

「はあ、不幸だ。分かりました。ただ先生少しだけ承太郎と話してもいいですか?」

「別に構わないですよ?家のことですか?」

小萌が聞いてきた。

「まあそんな感じですよ」

実は違った。作戦変更を伝えるためであった。

「承太郎すまない、俺は行けそうにないから、申し訳ないけど承太郎一人に頼んでもいいか?」

ここに来ての作戦変更であったが問題はなかった。

「ああ、一人でも問題ないぜ。あの場所に行けばいいんだな?」

「ああ、あの辺りからいつも御坂に追われてたからたぶんその辺だろう」

「ああ、わかった。その代わり今日も晩飯頼んでもいいか?」

「ぜんぜん大丈夫だ!頼んだぜ承太郎!」

「わかった。じゃあな」

「先生話終わりましたー!」

ここから上条の地獄は始まった。

その頃承太郎は予定通り場所に着いていた。

さて、御坂美琴どこにいるか。そんなことを考えていると背後から声をかけられた。

「見つけたわよ!昨日の決着つけるわよ!」

上条の言った通り向こうから出てきた。

「俺も探してたところだぜ。昨日の落とし前、きっちりつけてもらおうぜ」

お互い牽制し合い人の少ない河原へと移動した。河原へ着くと承太郎が口を開いた。

「昨日は正直言ってお前を舐めていた。だから今日最初から本気を出させてもらう」

「たかがレベル3がいい度胸ね、いいわよ。私も本気を出してあげる」

「怪我でもしたらねえぞ」

「こっちのセリフよ。さあ、いつでもいいわよ」

承太郎は遠慮なく作戦を実行した。

「いくぞ、スタープラチナ・ザ・ワールド」

この前の技かと御坂は身構えた。しかし次の瞬間信じられないことが起きた。承太郎が消えたのである。そんな、なんで、どこに？として御坂は察した。自分の敗北を。承太郎がいたのである。『真後ろ』に。

「どうした？もう終わりか」

「くっ！」

こいつ、なんなの!?!?と考えるも御坂の次の選択肢は一つしか残されていなかった。

「私の負けよ」

負けを認めると同時に崩れ去る物。それは、御坂のレベル5としてのプライドである。

承太郎の作戦通りであった。上条と承太郎が考えた作戦、それは御坂のレベル5のプライドを打ち砕かせることである。いくらレベル5と言えど中学生相手に本気で殴るほど承太郎と上条は子供ではない。彼女をいたぶるのではなく精神的に勝つ。これが承太郎と上条の考えた作戦であった。しかし上条は補習により不在であり、承太郎のスタープラチナでは御坂の切り札であるレールガンを完全に防ぐことが出来ないの、時止めの後反撃されるのではないかと内心不安であったが、御坂が降参してくれたのでホッとしていた。

「やけに素直だな。でも良かった、俺に女をいたぶる趣味はないからな。ほれ大丈夫か？」

「大丈夫、ありがとう。でも降参はするけどこれだけは教えて欲しい。

あなたは何者なの？その後ろにいるものは何なの？」

御坂は知りたかった。レベル5をここまで追い詰めた、承太郎の能力を。このままだと御坂が家に帰してくれなそうなので承太郎は話した、承太郎の能力、そしてなぜここに来たかを。

「そうだったのね。わかった、みんなにはこの事は一切喋らないわ」「約束だぜ。あともうこれつきりにして俺なんか喧嘩売るんじゃないわいぞ」

「わかったわ、ありがとう。承太郎、いや承太郎さん！」

この日、承太郎と御坂は和解した。しかし、上条はこの場におらず御坂と和解していなかったため、またしばらく追われることとなり週に2回ほどの間隔で学園都市に上条の

「不幸だ——！」

という声が響いたのであった。チャンチャン

To be continued↓

5話 虚空爆破事件

承太郎が転校して数週間が経とうとしていた。承太郎はだいぶ学園都市の生活に馴染んできており、とてもとは言えないが楽しい生活であった。御坂とも最初はいざこざがあったものの今は仲良く、勉強の教え合いをしたり一緒にご飯を食べに行くような仲になっていた。(御坂はレベル5の電撃使いであったため電気の知識に関しては高校生の承太郎も舌をまくほどであり、御坂に電気の知識を教えてもらおうお礼にご飯を食べに行くと言った感じであった)しかし、その影響でか白井黒子からは敵視された。上条は相変わらず御坂とは仲があまり良くないようであった。

そんなある日の朝、突如承太郎のもとに電話がかかってきた。

「はい、もしもし」

「おおー承太郎久しぶりじゃなーいやー元気そうで何よりじゃー！ハッハッハッハッ」

そう、承太郎の祖父であるジョセフであった。

「なんだじじいか、こんな朝早くに何の用だ？」

迷惑なじじいだ。朝から鬱陶しい。

「そうじゃー！それなんじゃがこの前承太郎の様子が気になって念写してみたんじやが、奇妙なものが写ったんじやよ」

「奇妙なもの？まさかDIOの手下の生き残りがこの学園都市に？」

「そうかもしれないし、違うかもしれない。承太郎を念写するとなぜか女の子が映るんじや」

「女の子？どういう女の子だ？」

どうせ御坂のことだろう。俺の周りで力が一番あるやつと言ったら御坂しかないからな。

「白髪の修道服を着ているシスターじゃ。気になるから数日後そちらに写真を送っておくから警戒はしておくんじやぞ」

白髪のシスター？心当たりはないが、やけに胸騒ぎがした。

「ああわかつたぜ、これで要件は終わりか？わかつた、じゃあな」

やれやれ、また厄介ごとか。まあいいや、時間も余裕があるからテ

テレビでも見るか。

『近頃、人通りの多い道路やコンビニなどで能力を使った爆発事件が起こっております。昨日ジャツジメントの学生が・・・』

ニユースキヤスターが淡々と語る。やれやれ学園都市も物騒だな。それからしばらくし、上条が訪ねてきて学校へと向かった。

「なあ承太郎、今日暇か？暇なら買い出しにデパートでも行かないか？今日6階で生活用品のスーパーセールがあるんだけど」

「なに？スーパーセールだと？それじゃあ行くしかないな」

「よし！決まった！じゃあ放課後すぐ行こうぜ！」

「デパートに行くのはいいんだが、上条。まさかとは思うが、今回も補習でドタキャンとかはないよな？」

あの御坂と戦いの時のように。

「ああ、今回は大丈夫だ！昨日のうちに補習は全部終わらせておいたからな！」

そして学校に着き、いつも通りの授業が始まった。

学校では上条と承太郎は最強のモテ属性タッグとされて男子からいつも話題にされ、気がつけば男子から2人は師匠と呼ばれていたのであった。そしてあつという間に時間が過ぎ、放課後となった。

「それではみなさーん、気をつけて帰るんですよー！」

帰りのHRが終わり、承太郎と上条はすぐさまデパートへと向かった。だが承太郎は気になることがあった。

「おい、上条。今日はやけにジャツジメントやアンチスキルが多いが何かあったのか？」

まさか朝の電話の・・・！

「ああ、そういえば能力者によるテロが起きてるらしいな、ほら朝のニユースでやってたろ？」

そういえば朝のニユースでそんなこと言ってたな。まあ警戒はしておくか。

そしてデパートに着いた2人。6階に向かう途中承太郎と上条は見たことのある人物を見つけた。

「やべっ！ビリビリだ！」

「お、御坂か」

嫌がる上条を引きずりながら承太郎は御坂の元へ向かった。

「よお、御坂」

御坂は驚いた様子で

「ああ承太郎さん……」

上条を見ると御坂は固まった。

「なんであんたがここに!?!?」

「承太郎と買い物だよ、買い物! ビリビリこそここでなにしてるんだよ。」

相変わらず仲が悪いな。と承太郎はため息をついた。

「女の子が買い物して悪いの!?!?」

だんだん2人がヒートアップしてきた。承太郎が止めようとしたその時、

「御坂さーん、なにしてるんですかー?」

と御坂の元へ2人の少女が来た。

「ああ、ごめん佐天さん初春さんちよつと待ててー!」

「あ!もしかして御坂さん、その大きい人が噂の彼氏さんですか? w w w」

すると突如、御坂が顔を真っ赤にして

「そ、そんなこつ、そんなわけないじゃん!私がつ年上の人なんかに……!行くわよ佐天さん初春さん!」

「あ、御坂待って下さいー!」

行ってしまった。なにがあつたのか承太郎と上条はさっぱり理解できなかったが、とりあえず6階に向かうことにした。

そして買い物を終え、次の店に行こうとした時デパートに放送が鳴り響いた。

『ただいまこのデパートに爆発の重力反応が確認されました。皆さんは冷静にジャッジメントとアンチスキルの指示に従い避難してください』

このまま買い物を続けたかった2人だったが、死ぬのは嫌なので避難することにした。だが、避難途中に何かを探し回っている御坂を見

かけた。

「おい御坂！なにしてる！避難しないのか？」

承太郎が声をかける。

「あ、承太郎さん！実は女の子が1人迷子になって……。さつきから探してるけどいないの！」

「なに!? ジャツジメントやアンチスキルはどうした」

「それが避難誘導と爆弾を探すので手一杯らしくて……」

「それは大変だ！承太郎、探そう！」

「ああ！」

3人で探すことにした。そしてしばらく探すと3階にいるという情報が入り承太郎たちは向かった。

途中で上条と合流し現場に向かうと、今にも爆発するぬいぐるみと、少女をかばうさつき御坂と一緒にいた花飾りの子と、レールガンを打とうとしたが手が滑りコインを落とす御坂の3人の姿があった。そして即座に承太郎が反応し

「上条、時を止めるから3人の前に出て爆風を防いでくれ。この爆発は異能の力だから防げるはずだ！俺は爆発で出た破片を弾く！破片は幻想殺しでは防げないからな」

「わかった！」

「スタープラチナ・ザ・ワールド」

上条の返事を聞くと同時に時を止めた。だが、すでに爆発したようだ。しかしまだ爆風は届いていない、まだ間に合う！

残り5秒、上条は3人の前に向かうが上条のスピードからして前に出てちようど5秒だな。よし、破片がスタープラチナの射程に入った！残り3秒！

「オラオラオラア！」

ガラス破片を誰もいない方向に飛ばす。これで大……！なに！白井だと！

そこには、御坂達とは爆弾を挟んで反対側にちようどテレポートしてきた白井黒子の姿があった。そしてそこへ向かう大量の破片。くっ！しょうがないか！今から白井を助けに行けば承太郎自身が危

ない。おそらく、あの破片を全て防ぐのは不可能だろう。だがこのままでは確実に白井は死ぬ。承太郎は覚悟を決めた。2秒前・・・1秒前・・・0。

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ・・・」

白井黒子は全く理解できなかった。爆弾発見の知らせを受けてレポートした瞬間爆発に巻き込まれた。と思ったら目の前に大男が現れ盾となり白井を爆風から守った。よく見るとその大男は白井がいつも目の敵にしていた承太郎であった。

そして、爆発が収まり白井が承太郎に駆け寄った。

「なんのつもりですか？ 私ならレポートで逃げられましたのに」

「くっ！ すまねえ上条、ラッシュで爆風は相殺できたが、破片まで手が回らなかつ・・・た・・・ぜ・・・」

バタン

白井の方に倒れる承太郎。

「ちよつと離れてくださいまし！ 私はそんな・・・」

しかしその時、白井は異変に気がついた。手が血にまみれていることに。まさかと思った白井は承太郎を見た。そこには脇腹にグツサリと刺さっている大きな破片があった。

「承太郎ーーーーー！！」

上条の叫びがうっすらと聞こえてきた。しかしそこで承太郎の意識は途絶えたのである。

T o b e c o n t i n u e d ↓

6話 禁書日録（前編）

虚空爆破事件から3日後、承太郎は目を覚ました。なぜ病院なんかにいるのかと考えていると、なんとなく思い出してきた。あの時、承太郎は白井を助けるために残りの3秒を使い白井の元へ向かい、ラツシュで爆風とを相殺すると同時に破片を跳ね返すはずだった。が、しかし爆風と細かい破片に気を取られ大きい破片を弾くことに失敗し、脇腹に刺さって激しい激痛に襲われた所までは覚えている。

そんなことを考えていると上条が病室入ってきた。

「おお！承太郎、やっと目を覚ましたのか！心配させやがって」

「おかげさまでなんとか無事だぜ。それより、白井の方は無事だったか？」

破片は承太郎に刺さったもの以外は全て弾いたはずだが不安だったので確認した。

「ああ、お前のおかげでかすり傷で済んでたよ」

「なら良かった」

そんなことを上条と話しているとカエルみたいな医者が入ってきた。

「やあ、気がついたようだけど傷の具合はどうだい？」

「ああ、少し痛むが動いた感じだと日常生活は問題無さそうだ」

承太郎は早くいつもの生活に戻りたかった。ずっと病室に居ては体が鈍ってしまう。

「その様子だと問題は無さそうだね。傷の具合によっては4日後ぐらいには退院できるだろう。でも、無理すればまた傷が広がるから、退院しても2、3週間は安静にしてくれよ」

「ああ、わかった」

突然上条が、今日補習であることを思い出した。

「あつーやばい、今日補習だった！ごめんな承太郎、俺補習あるから！じゃあなー」

「おお、じゃあな」

日曜日も補習とは上条も大変だな。

それから2時間後、承太郎が目が覚めたことを聞いて小萌と黄泉川が来た。やれやれ、ゆつくり休みたいところなんだが。

「空条ちゃん大丈夫なのですか!?!?」

「空条、大丈夫か!?!?」

「ああ、おかげさまでなんとかな」

やれやれ、みんなこんな感じでお見舞いに来られると考えるとさすがに鬱陶しいぜ。

「すまない、空条。現場の近くにいたのにお前を守れなくて」

そういえば黄泉川はアンチスキルだったか。もしあの爆発現場にいても爆発に巻き込まれるだけだったので居なくて良かった。

「いや、ぜんぜん気にしてないぜ。それより犯人はどうなった?」

承太郎が一番気になっていた事は、犯人が逃走しさらに犠牲者が増えていたのではないかと懸念していた。しかし、黄泉川の話によると、現場近くに居て任意同行を求めると反抗し逃げ出そうとしたのですぐさま御用となったらしい。やれやれ、これで一件落着か。

それから3時間後、今度は御坂と白井がお見舞いに来て病室が騒がしくなり休養どころではなかった承太郎であった。

そして4日後、ついに承太郎は退院し、さっさと学校へと通う事にした。学校へ戻った時のみんなの反応がとても鬱陶しがったが心配してくれているという事を考えて我慢した。

そしてこれは試して分かった事だが、どうやら傷の影響で体が弱っており、スタープラチナを本気で使う事ができない。それはつまり前のように激しい戦闘がしばらくできないということ。そしてザ・ワールドを使う事ができないという事だ。強敵が現れたら上条に頼るしかないという事か。やれやれだぜ。

しかし承太郎の心配とは裏腹に時は過ぎ、強敵が現れる事はなく、あつという間に7月末のの終業式の日となった。事件からすでに2週間が経ち、承太郎の体力はまだ完全とはいかないが、回復し戦闘は辛うじて可能になった。ただ、まだ完全ではないのでザ・ワールドは使うことができなかった。何より先日ジョセフより送られてきた写真に写っていた、白髪のシスターの事で何も起きないかと不安だっ

た。

そんな事をよそに小萌の話が終わり、夏休みが始まった。

「じゃあみなさーん！夏休みだからと言ってハメを外しすぎないでくださいよー」

夏休みが始まった。と言いたいが、承太郎は入院で休んだ分、上条は期末テストの赤点の補習があり、明日からしばらくは学校があった。

そして、HRが終わってすぐ、上条に久しぶりに晩御飯に誘われ2人で食へに行つた。2人でしばらく歩き、いつものファミレスへと入つた。

「俺はパスタにするけど承太郎は何にするんだー？」

「俺はハンバーグ定食だ」

「分かつた。じゃあ注文する・・・ん？あれはビリビリ？」

上条の見た先には、不良と話をする御坂の姿があつた。その様子を見た上条が、

「なあ、承太郎。あのままだとあいつらやばくないか？」

「確かにな。あいつら、話している相手がレベル5のレールガンつて事気づいないな。あのままだと確実に・・・。」

やれやれ、たまには人助けでもするか。上条と承太郎は御坂と話す不良を助けに向かつた。

「おいおい、やめなつてその子にナンパするのは」

上条が先に向かつた。

「ああん？誰だあてめえ？」

「そんな事はいいからこのビリビリをナンパするのはやめた方が身のためだよ」

後ろには、突然の事に戸惑う御坂と白井の姿があつた。

ん？何か面倒ごとの予感がするな。これは下手に首を突つ込まない方が身のためか。すると御坂が

「ちよつとーあんた何やってんの？」

「いや、何って人助けだよ。なあ承太郎」

不良たちは、上条が承太郎と呼んだ人物を見た。その瞬間、190

センチはある身長とガツチリとした体を見て、顔を真っ青にして逃げ出して行った。

「あんなやつ勝てるわけねえ！」

「逃げろー！」

やれやれ、どうやら見た目だけの腰抜けだけだったらしいな。しかし怪我の影響で今の状態だと喧嘩が出来ないから逃げ出してくれて助かったぜ。

「ちよつと待ってー！」

御坂と白井が焦って不良たちを追い出す。やっぱりビンゴだったか。

「おーい、ビリビリー！何があったのかわからないけどとりあえず追いかけてみるよ！承太郎はどうする？」

「俺はまだ傷が治り切っていないから、すまんが俺は残ってる。7時まで帰ってこなければ先に寮に戻ってる」

正直、傷が治り切っていないという事もあったが一番の理由は、これ以上面倒ごとに巻き込まれたくないというのが本音であった。

「分かった！じゃあ後でな！」

その後、1人で食事を済ませ、7時まで上条の事を待ったものの、予想通り帰ってくる気配がなかったので寮へ戻った。

次の日の朝。承太郎は最高に機嫌が悪かった。上条と御坂がなぜか戦い、御坂が奥の手である能力の雷を落とした影響で上条と承太郎の寮周辺で停電が起き、この真夏にクーラーと扇風機が使えず、また冷蔵庫の物も全滅であった。

「やれやれ、御坂のやつめ・・・」

承太郎が冷蔵庫の被害確認をしていたところ、突如上条に隣のベランダから呼ばれた。

「承太郎ー！ちよつと来てくれー！ベランダに変なものがかかっているー！」

クーラーが使えず窓を開けていたのはつきりと聞こえた。何事だ？朝から。そう思いつつ上条の家に向かい、ベランダを見た。そこには、布団などではないなにか白い物体がかけられていた。

「承太郎。これ、何に見える？」

「何ってそりゃあ・・・っ！」

上条の家のベランダにかかっていた物。それはジョセフから送られてきた写真に写っていた白髪のシスターの少女であった。

「うう・・・」

少女が微かに動いた。

「上条気をつけ・・・」

承太郎が、気をつけろと上条に言おうとした時、ぐうぐうぐうとい
う音が、この少女から聞こえた。腹の音か？そして少女は喋った

「お腹すいた・・・」

『はあ？』

2人は声を揃えて言った。

「お腹すいたって言うてるんだよ？」

あまりの唐突すぎる言葉に承太郎と上条は目が点になったので
あった。一体この少女は何者であるのか？

To be continued↓

6話 禁書目録（後編）

「お腹すいたって言ってるんだよ?」

急になんだこいつは!?!と2人は思った。

「何か食べさせてくれると嬉しいな」

何かって言われてもなー。すると上条が、腐っている上に踏んづけたゲテモノ焼きそばパンを見つけた。

「こいつには、どこか遠いところで幸せになつてもらおうとするか。なあ上条。」

ニヤリと上条は頷いた。そして上条が焼きそばパン?を持ち、白髪シスターのところへ向かった。

「こんなもんしかないけどいいか?」

すると、このシスターはすぐさま

「ありがとう!そしていただきます!!?」

ガブリ

「うぎやあああああ!」

なんと、このシスターは上条の手ごと焼きそばパンを食べたのである。やれやれ、こいつはある意味ただもんじやないな。

承太郎はジョセフの念写に写っていたという事が気になっていたので、落ち着いたところこのシスターから事情を聞こうと思っていたが、お腹が空いて喋れないと言うので上条に腐った野菜でゲテモノ料理を作らせ、このシスターに食べさせた。そしてシスターがゲテモノ料理を食べ終わると1人で勝手に喋りだした。

「美味しい料理ありがとう!自己紹介がまだだったね。私はインデックス。目次って意味だよ」

「おい、ちよつと待て。インデックスって偽名じゃあないのか?」

「そうだ!偽名じゃなくて、本名を教えてください!てかどうやって学園都市に入ってきたんだよ!?!?」

承太郎と上条は怪しんだ。

「むー!インデックスは偽名じゃなくて本名だよ!全くこの人たちはみんな失礼なんだよ!」

そんな格好してるからだろ。と2人は思った。

「そんな事はどうだっていいが、なんでベランダになんか干されてたんだ?」

「私、追われてたの。魔術結社に。逃げてる途中でビルからビルに飛び移ろうとした時に落っこちちゃって」

「ビルからビルに? てめえ超能力者か?」

能力がなきゃこの高さから落ちたら死ぬのは当たり前のことだ。つまり落ちても無事ということはなんらかの能力を持っているということだ。

「違うよ。魔術師なんだよ」

「魔術師?」

「うん。私はイギリス清教第零聖堂区の「必要悪の教会（ネセサリウス）」に所属する魔術師だよ」

「イギリス清教? 魔術師?」

上条のこのシスターに対する疑念が深まる中、承太郎はあることを確認した

「まあいい、それよりまず一つだけお前に確認したい事がある。てめえ俺の後ろのが見えるか?」

承太郎はスタープラチナを出した。

「見えるよ! これ、スタンドでしょ? 魔道書の中に載ってたよ! 確かに魂を弓と矢の力によって魂を、具現化したものでしょ。すごい、初めて見た!」

「なに? てめえ、これが本当に見えるのか!?!?」

スタンドはスタンド使いにしか見えない。だがこいつはスタンド使じゃないのに見えている!?!? なんなんだこいつは。

「うん。たぶんこれは予想だけど、魔術師が使う魔術とスタンドはかなり近いものだから見えるんだと思う。超能力者が見えない理由はよくわからないけど」

「さっきから魔術師とか言ってるがお前はどんな能力を持ってるんだ?」

「これが一番の問題だ」

「私は魔術は使えないよ。でもその代わりに完全記憶能力を持つてるよ」

「完全記憶能力？」

「そうだよ。魔道書の内容とここ一年間で見たもの聞いたものは完全に覚えてるよ。」

「しかし妙だな。それじゃあ高層マンションから落ちても無傷なんだ？」

「それはこの服のおかげなんだよ」

2人は彼女の修道服を見た。どこからどう見てもただの修道服だ。

「この服は歩く教会の能力を持っていて、どんな攻撃や衝撃も無力化しちゃうんだよ」

「ほう、それは面白い能力だな。だったらここは一つ矛盾を解決するか」

「矛盾？」

彼女が不思議そうに聞いてきた。

「そうだ。さつきお前が噛んだこの上条には幻想殺しという能力がある。異能の力ならなんでも無力化出来るってやつだ。お前の歩く教会と幻想殺しどっちが強いかってことだ。ついでに効果があればお前が異能の力を持っていることの証拠になる」

「え×俺がやるの？」

「ああ、スタープラチナで殴って効果がなかったら大怪我させちゃうからな。お前の幻想殺しの方が安全だ」

「まあ確かにな。いいぜやってやるよ」

「さあ、いつでも来ていいんだよ」

「よしー！」

上条の右手が彼女の修道服に触れる。すると

ハラハラハラ

なんと服が突然バラバラになったのである。もちろん彼女の裸をモロに見た上条は5、6回噛まれた。承太郎はギリギリ見えなかったのと彼女から離れていたので難を逃れた。やれやれ、危なかったぜ。

「不幸だー！ー！ー！」

彼女がこのままだと着るものがないので、お詫びとして承太郎がスタープラチナの精密さを生かし縫い合わせた。

「ほれ、できたぞ。すまなかったな」

「むー、いきなり女の子を裸にさせるなんてあんまりなんだよ」

このシスターはまだ不機嫌である。

「悪かったな。まさかこうなるとまでは思いつかなかったんでな」

「あ、ははははははは……。不幸だ……。」

噛まれた上条は、未だに放心状態である

「そういやお前なんで追われてたんだ？さつき魔道書がどうたらとか言ってたな」

「私は10万3千冊の魔道書を持っているから、それが目当てで狙われてるんだと思う」

するとここで上条が話しかけてきた

「承太郎ー！小萌先生が補習忘れてないですか？早く来ないと追加ですよ？だつてー！」

やれやれ、話の途中だがそろそろ時間がまづいか

「すまねえ、俺らは補習があるから今から学校に行くがこれからどうする？」

「私もこれで行くとするよ。もしかしたら奴らがここに来るかもしれないからね」

「分かった。気をつけろよ」

「うん！ありがとう！」

そして承太郎が行こうとした時、上条がシスターに声をかけた。

「なあ、よかつたらここにいてもいいんだぞ？一人じゃ不安だろ？」

「じゃあ地獄まで一緒に来てくれる？」

「っ！」

2人とも息を飲んだ。この一言は、小さな少女の抱える過酷な運命を物語っていたからだ。

「ごめんね！でも巻き込みたくないから。じゃあねありがとうごさいます！」

ペコリと、お辞儀をして彼女は消えていった。

しかし上条と承太郎は、自分でもよくわからないがとてつもない不安に襲われていたのであった。

T o b e c o n t i n u e d ↓

7話 ステイルⅡマグヌス

インデックスを見送った承太郎と上条は補修のため、学校へと向かっていった。

「なあ、承太郎。あいつ、大丈夫かな？俺の家に帽子忘れて行ったけど」

「大丈夫だろう。近くの教会に向かうつつつてたからな。たぶん」

「そうか。それはそうと、承太郎。体の方はもう大丈夫なのか？」

「まあ日常生活には問題ないが、あのインデックスとかいう奴が言っていた魔術師とかが現れたらまずいかもな」

「ま、大丈夫だろう。承太郎の事だし」

そんなことを話しながら2人は学校に向かい、補習を受けた。しかし、インデックスのことが気になり2人は集中できずにいた。

「なんですかー、空条ちゃん上条ちゃん。考え事ですかー？」

「まずい！気づかれた。上条が焦る。すると承太郎が、

「いや、なんでもねーぜ。それより小萌、早く進めてくれ」

「もー！空条ちゃん。先生をしっかりつけるのですよ！」

承太郎サンキュー。そんなことを考えていると承太郎から声をかけられた。

「気になるのもわかるが、ここでバレると補習が長引くぞ」

「ああ、すまない」

「それはそうと上条。すまないが油性ペンを貸してくれないか？俺のがちよつとインクが切れちまつててな」

「ああ、いいぜ」

「すまない。あと帰ってからでも使うから今日中借りててもいいか？」

「ああ、明日ちゃんと返してくれよ！」

そんなこともありながらも2人は5時までみっちり補習を受けた。

「小萌の奴め、すぐ終わるなんてぬかしやがって。もう5時じゃあねーか」

「いや、承太郎。こんなのまだマシな方だぞ・・・」

「くっ！もう補習はこりこりだぜ」

小萌の補修の帰り道、そんなことを話していると突然後ろから聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「あんた！今日こそ決着つけるわよ！」

「げっ！ビリビリ！」

「おお、御坂か。ちょうどいい」

「あ！承太郎さん。お久しぶりです」

「ああ久しぶりだな。それはそうと御坂。お前、昨日の夜何をした？」「何を？・・・あ！」

上条は知っていた。昨日御坂が上条へ雷を落としたため、承太郎の部屋が停電になり、冷蔵庫の中身が全滅したことを。

「なあ、御坂。お前が昨日雷を落としたおかげで、こっちはクーラーが使えない、冷蔵庫の中身が全滅ということになったんだがそこんところはどうしてくれるんだ？」

上条は思った。こいつ、まだ怒ってたのか。承太郎の怒るところを見た御坂は

「あ、あははははは。ごめんなさーい！」

案の定、全速力で逃げて行ったのである。

「御坂の奴逃げやがったか。まあいい、あの分だと反省しているようだから今回は許してやるか」

「お前、見た目によらず優しいんだな」

「ん？上条なんか言ったか？」

「いや、聞かなかったことにおいてくれ」

そうして2人は部屋の前まで帰ってきた。しかし上条の部屋の前には6台ほどの掃除ロボが集まっていた。

「なんだなんだ、今度はこの上条さんの家の前に何か不法投棄でもされたのか？」

「いや、上条よく見ろ。あれはまた行倒れてるインデックスだ」

「なんだまたあいつかー！しょうがない、今度は美味しい飯でも・・・」

インデックスの様子を見た上条の様子が一変した。

「どうした？上条？」

「承太郎・・・こいつ切られてる」

上条が震えた声で喋る。

「切られてるだど!?」

承太郎もすぐに駆け寄る。そこには背中を切られ血を流して倒れるインデックスの姿があった。

「くそっ！誰にやられたんだ！こんなひどいこと！」

「おい、上条。インデックスを連れて安全な所に逃げろ」

「どうしてだ承太郎!?」

「おい、居るのは分かってるぞ。出てきな」

「おお、僕の存在に気がつくとは」

すると、長身で赤髪の頬にバーコードが付いた男が出てきた。

「わざわざ網にかかりに戻ってくるとはね。忘れ物でもしたのかね？」

その男の様子を見て承太郎は思った。こいつ、ただもんじゃあない。

「ああ、酷くやったね。神裂が斬ったって話は聞いてたけど」

それを聞いていた承太郎がまだ逃げない上条を見て。

「おい、上条！早く行きやがれ！邪魔だ！」

「あ、ああ！」

上条がインデックスを抱え、寮から逃げて行った。

「ああ、逃げたか。まあ、逃げたとしてもちゃんと回収するけどね」

「おい、待ちな。てめえ、何をするつもりだ？」

なぜそうまでしてインデックスを回収したいのか、承太郎は気になっっていた。

「君は彼女の能力を知っているかい？」

「ああ、完全記憶能力のことか」

確かインデックスと話した時に言っていたな。

「そうだ。そして彼女にはもう一つ大事なものがある」

「大事もの？」

「そう、完全記憶能力で覚えた10万3千冊の魔道書の情報だよ。僕は彼女を保護するために来た」

「保護か。じゃあなぜインデックスを傷つけた？」

「やったのは僕じゃないよ。まあ、僕の仲間だけどね」

「てめえ、何様のつもりだ！」

承太郎が怒りのあまり前が出る。

「ステイルⅡマグヌスと名乗りたいところだけどこの情報を聞いた以上君にはこの名を名乗ろう。魔法名、つまり殺し名だ。Fortis 931」

バーコードの男がタバコを捨てた。次の瞬間彼の手から炎が出た。

「P u r r i s a z N a u p i z G e b o (巨人に苦痛の贈り物を)」

承太郎が炎に包まれる。

「ふん、口の割には大したことなかったな」

バーコードの男が笑う。

「やれやれだぜ。スタープラチナ！」

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ」

スタープラチナで承太郎に来る炎を払う。

「アヴドゥルの炎と比べれば、てめえの炎なんてどうってことはねえぜ」

「お前、その背中から出ているものは・・・!??!」

ステイルは焦った。まさかこの学園都市にスタンド使いが居るとは。しかも、あのD I Oを倒した空条承太郎。面白い。

「そうか、お前がああ噂の空条承太郎か」

「そうだが、それがどうした？」

「ならば、僕も本気を出そう・・・」

ステイルの本気の力とは!??!承太郎の勝敗は!??!

To be continued↓

8話 魔女狩りの王（イノケンティウス）

承太郎は、インデックスを巡ってステイルⅡマグヌスという魔術師と戦っていた。しかし、彼は承太郎がスタンド使いと分かると奥の手を出そうとする。この男の奥の手とは!? この戦いの勝敗は!?

「てめえ、何をするつもりだ？」

「世界を構築する五大元素の一つ、偉大なる始まりの炎よ、その名は炎、その役は剣、顕現せよ！我が身を喰らいて力と為せー！」

この魔術師は何かを呟き始めた。承太郎がヤバいと思った瞬間、彼よりスタンドらしきものが出てきた。

「殺れ、魔女狩りの王、イノケンティウス！」

炎のスタンドらしきものが承太郎を襲う。

「なんだこいつはスタンドか？まあどつちにしろ・・・、ぶちのめす！」
オラァ！とそのスタンドらしき物にスタープラチナで拳を振り下ろした。すると、意外なことにスタンドらしき物は四散した。

と、思われたが、なんとすぐに元どおりに戻ったのである。

「なんだ!? こいつはスタンドじゃあないのか!?」

「このイノケンティウスはルーンの力によって呼び出されたもの。スタンドとは違い、僕が指示を出せるしダメージを受けない。これと同じルーンを破壊しないと消せない。まあ、下の階に何百枚も貼つてあるからそれは不可能だけどね」

なに、こいつはマジにやばいやつだぜ。承太郎は久しぶりに焦りを覚えた。

「復活するってんなら、本体を叩くまでだぜ」

「ほう、だが僕に近づけるかい？」

イノケンティウスの炎が承太郎を再び襲う。承太郎はそのまま突撃しながらスタープラチナでイノケンティウスを弾く。

オラララオラァ！

だが、承太郎の攻撃虚しく、イノケンティウスの攻撃により承太郎は弾き返される。

「なんだ、最強のスタンド使いと言ってもそんなものか。噂ほどじゃ

ないね」

「まずい、この前の傷が開きかかっている。だがこの野郎を放っておくわけにもいかないぜ。奴のスタンドもどきは何度も復活できると言っても何処かしらには弱点はあるはずだ……！」

「やれやれ、この戦法を使うのはあのスライム野郎以来だぜ」

「戦法？」

「ああ、ジョースター家伝統の戦法だ」

「なんだそれは？」

「逃げる！」

承太郎は地上に向かい飛び降りた。

「なに、こいつ正気か!?？イノケンティウス、追え！」

と、すぐさま承太郎は下の階に飛び移る。

ふう、なんとか撒けたようだ。しかし、承太郎がそこで目にしたものは……

「やれやれだぜ。どうやら数百枚つてのは嘘じゃあなかったみたいだな」

承太郎の目の前には壁や床一面に貼られているルーンが目に入った。このルーンをなんとかしなきゃあな。だがこの数どうする!?？ん、待てよ。確か前にアブドウルがルーンについて話していたな。

すると承太郎の後ろに再びイノケンティウスが現れた。

オラオラオラ！承太郎が逃げながら攻撃する。だがその攻撃は効果がなく壁や天井などに当たる。そして、承太郎は下へ下へと逃げて行った。

そして数分後、

「静かになった。もう片付いたようだ。さて、じゃあ僕はインデックスの回収に向かうか」

インデックスを探しに向かおうとするステイル。だが、その後ろに何者かが現れた。

「神裂かい？いや、ちがうな、誰だ？」

「やれやれだぜ。さつき会ったばかりなのにもう忘れちゃったか？」

そう、ステイルの後ろに現れた男。承太郎である。

「そうか、まだやられてなかったか。だが同じこと！イノケンティウス！」

しかし、ステイルの声虚しくイノケンティウスは出てこない。

「なに!?? どういうことだ!??」

「どうした? てめえの自慢のイノケンティウスとやらは使わないのか?」

「くっ! どうしたイノケンティウス!?? きさまっ、なにをした!??」

イノケンティウス出てこないという事はルーンに何かあったらしい。だが、この短時間で全て取り除けるものでもない。あれは魔術で頑丈に固定されているのだから。

「これは昔ある人物から聞いた話なんだが。ルーンってのは書いてある文字に意味があるんだってな。だったら余計なものをこの油性ペンで書きまえばそのルーンとやらは無効になるってわけだ。やれやれ、まさか上条から借りていたペンが役に立つとはな」

「なに!?? まさかお前、逃げるフリをしてルーンに書き込みを!??」

「ああ、スタープラチナの精密性とスピードを使えば大したことじゃあなかったな」

「くっ! 巨人にくっ!」

「遅い! スタープラチナ!」

オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ!

彼の顔面にスタープラチナの拳が叩き込まれる。

「このパワーは!」

そう言つてステイルは吹き飛ばされる。

「手加減はして置いた。全治1週間つてとこだ。早く祖国に帰んな」

そう言つて承太郎は上条の元へと向かった。どうやら小萌の家にいるらしい。やれやれ、戦いの後で傷が開きかかっているのに:。そう考えて歩いていると承太郎の意識が薄れてきた。承太郎は気づいていなかった、いや気付こうとしていなかったが、傷口は再び開いていたのである。ドクドクと脇腹から出てくる血。これはまずいな小萌の家まで持たん……。そう考えた直後、承太郎の意識は途絶えた。

インデックスの安否は☒上条は承太郎の危機に間に合うか☒魔術師の出方は!?!?

T o b e c o n t i n u e d ↓

9話 警告

ステイルとの戦いに勝てた承太郎。しかし爆破事故での傷口が戦いにより再び開き、出血多量により気を失った承太郎。

ふと気がつくとき、承太郎は白い空間の中にいた。

「ここは？俺は死んだのか？」

そんなことを考えていると懐かしい声が聞こえてきた。

「やあ、承太郎。久しぶり」

「承太郎。エジプト以来だな」

「ガウガウ」

そう、エジプトでの戦いで死んだ花京院、アヴドウル、イギーである。

「なんだお前らか。ということは俺は死んだんだな」

「いや、承太郎。君はまだ死んではいないよ」

「死んでない？」

承太郎は花京院に問いかける。

「そうだ、承太郎。お前はまだ死んでない。気を失ってるだけだ。命に別条はない」

「そうか。それならいいが、なんでなんでてめえらが俺に会いに来たんだ？」

「警告だよ。承太郎」

「警告？」

「ああ。お前が先日出会った彼女の事だ。彼女に関わればおそろくお前は道半ばで死ぬことになる。彼女には関わらない方がいい」

「なんだ、そんなことを言いに来たのか。なあアヴドウル。俺は決めたんだ。彼女、インデックスを守るってな」

「なぜだ承太郎？」

「決まってるじゃあねえかアヴドウル。あんなの見ちまった以上見て見ぬ振りはできねえぜ。こうなった以上地獄だろうとついていく覚悟だ。たとえ俺が死ぬとしてもな」

「ふっ。承太郎、変わったな」

「そうか？まあ確かにお前たちのおかげで少しは変わったかもしれないな」

「ははは、そうか。わかったよ。お前は一度決めたら曲げない主義だからな」

「ああ、わざわざ来てもらったのにすまないな」

「大丈夫だよ、承太郎。僕たちは君をいつでも見守っているから」

「ガウガウ」

「そうと決まれば承太郎。早く助けに行け。このままだとあの上条とかいいう男も危ないぞ」

「わかった。じゃあなまたいつか会おうぜ花京院、アヴドウル、イギー」

そう言つて承太郎は光が溢れる方へと走り出した。

病室にて

「・・・うっ！」

「承太郎さん!?!?先生ー!承太郎さんが意識を取り戻しました!」
するとカエル顔の医者が承太郎の病室に入ってきた。

「おお、やっと意識を取り戻したか。もう4日も意識を失ってたんだよ」

「ああ、すまなかつた。ところで先生。退院はいつ頃できる?出来れば今すぐにでも退院したいんだが?」

それを聞いた看護婦が全力で止めにかかる。

「そんな、退院なんて不可能です!1週間は安静にしていなと・・・」
しかし、承太郎の目を見たカエル顔の先生は

「やれやれ、止めても君は抜け出していくんだらう?どうしてもつて言うなら構わないよ」

「先生!」

看護婦が戸惑う

「ただし、一つ条件がある。生きて帰ってきてくれよ。そうすればいくらでも治療してあげるよ」

「恩にきるぜ先生」

承太郎は急いで着替え、上条やインデックスが居る小萌の家へと向かった。4日間休んだおかげで、完全とまでは行かないが体力は回復していた。スタープラチナの調子もいい。

そうしている間に小萌の家に着いた。先日の上条からのメールに住所が載っていたのでスムーズに来れたのであった。しかし、どうやら小萌の家はこのボロアパートの一室らしい。

「邪魔するぜ・・・!?？」

小萌の部屋に入った承太郎。しかし、そこには小萌の姿はなく全身怪我だらけの上条の姿と、それを看病するインデックスの姿があった。

「承太郎！無事だったんだ！」

インデックスが飛びついて来た。

「心配したんだよ！魔術師と戦ってから全く連絡がなくて。マンションに戻れば血痕があったし！」

「すまねえ、気をつけるぜ。それよりインデックス、上条は何があった？」

「あまり詳しくは分からないけど魔術師と戦って、血だらけになってるところを小萌に発見されて、家で看病してるんだよ！」

上条も魔術師と戦ったのか。さすがに上条1人じゃあ部が悪すぎたか。

「それとだインデックス。お前に聞きたいことがある」「なに？」

「お前のこと、包み隠さず全て教えてくれ。なぜ魔術師にここまで狙われるのか。その理由を。」

承太郎はインデックスから聞いた。同じ十字教でも色々な種類があり、世界の管理と運営を司るローマ正教。非現実の検閲と削除に特化したロシア成教。そして対魔術師用の技術が異常に発達したイギリス清教。そしてそのイギリス清教の中の魔術師を討つために魔術を調べ上げて対抗策を練る特殊機関である必要悪の教会（ネセサリウス）。そこにインデックスは所属している。インデックスは一度見たものは絶対に忘れないから、彼らの手によって10万3000冊の魔

導書を頭に叩き込まれた。世界中の魔術を知れば世界中の魔術を中和出来る。だがその代わり彼女の能力を使えば世界の全てをねじ曲げる力を手に入れることができる。ゆえに彼女は他の魔術師に狙われるということだ。

「なりほどな。つまりそのいざこざに俺たちは巻き込まれてるってわけだな」

「うん、ごめんね」

「いや、問題ねえぜ。あとな、インデックス。そこはごめんじやなくて、よろしくだろ?」

「うん!ありがとう!よろしくね、承太郎!」

すると、上条が目を覚ました。

「そうだインデックス。上条は何日ぐらい寝てたんだ?」

「3日ぐらいかな」

「そうか。おい上条!大丈夫か?」

「・・・?承太郎!無事だったのか!」

「おい、まずてめえは自分の心配をしろ」

「ああ、そうだな!そーいや俺はどのくらい寝てたんだ?」

「3日らしいが?」

「なに!3日!」

「ああ、そうだが。それがどうした?」

「まずいぞ承太郎!このままだと・・・」

ガチャ

突然2人組の男女が家に上がりこんできた。よく見ると長身の赤髪で頬にバーコード。間違いなく先日戦ったステイルⅡマグヌスだ。もう片方の破廉恥女は誰か知らんが恐らく魔術師だろう。

「なんだ、その面、ステイルⅡマグヌスか」

「おいおい、命の恩人にそんな態度はないんじゃないか?」

「命の恩人だと?」

「ああ、あの出血してるところ応急処置をしたのは僕なんだけどな」

「なぜ助けた」

「君、僕のことを考えて手加減したよね?僕は借りをもらいっぱな

しつてのは好きじゃないんでね」

「それに関しては礼を言わせてもらおうが、今回は何の用だ？ インデックスの回収か？」

「なんだ、上条当麻から聞いてなかったのか？」

「なんのことだ？」

ドサッ

インデックスが後ろで倒れる音が聞こえた。

「おい、しっかりしろインデックス！」

上条がインデックスを起こすが起きない。インデックスの顔は真っ青である。それを見た承太郎は唾然とした。

「空条承太郎。君はどうやら本当に知らないようだね」

「てめえ、なにが起こっているのか早く話しやがれ！」

突然倒れたインデックス。一体彼女の身になにが起きてしまったのか!?!?

To be continued↓

10話 幻想殺し

辺りはすっかり日が暮れ、もう夜となっていた。

「な、なんだと・・・!?」

承太郎は衝撃を受けていた。ステイルの話によるとインデックスは10万3千冊の魔道書により、脳の85パーセントを使っている。なおかつ彼女は完全記憶能力を持っているので忘れることができず、1年に1度記憶を消さなければならなかった。そしてその記憶の限界が今日である。今日の午前0時前までに彼女の記憶を消さなければ『死ぬ』。

そして、ステイルと神裂はインデックスの大切な友人であるらしい。大切な友人の記憶を1年に1度消さなくてはならない。現実とは残酷である。

この事は、上条がこの前に神裂と戦った時に聞いていたらしいが、気を失っていたため話せなかった。

「やれやれだぜ。まさかこんなガキのために面倒な事に巻き込まれるとはな。小萌が出張で留守でよかったぜ」

「なんだと貴様！こんなガキだと！」

インデックスが侮辱された事に怒り、ステイルが承太郎に殴りかかった。このままでは戦闘になりかねないので

上条と神裂で全力でために入り事なきを得たが口論が続いていた。

「やれやれ、こんなんだからためえはインデックスを助けられねえんだ。もつと冷静に考えてみる」

「なに？冷静に考えろ？では彼女の顔を見てみる！こんな苦しそうな顔をしているのに君はそれを見殺しにするのか？」

ステイルは怒りに満ちていた。大体この前インデックスを取り返すためとはいえ、インデックスを回収などと言った事に対して未だに罪悪感を抱いていると言うのに。承太郎は遠慮なくインデックス本人の前で侮辱した。それが許せなかった。しかし、承太郎の答えはステイルの考えとは全く正反対であった。

「見殺しにはしねえ。絶対に助け出す！そうだろ、上条？」

「ああ！もちろん絶対！に助け出す！」

しかしここで神裂が問題点を指摘する。

「無謀です！大体方法はあるんですか？」

「いや、方法はわからない。だが原因はなんとなく分かった」

「貴様！デタラメを言うな！」

「おい！神裂とか言うやつ！ステイルを黙らせろ！」

神裂に口を押さえられモゴモゴするステイル。

「大体、てめえら自分の話の矛盾に気がつかないのか？」

矛盾？なんのことだ？と顔を見合わせる二人。上条も不思議な顔をしている。

「いいか？脳つてのはな、完全に記憶できても約180年分は記憶することが出来る。だがインデックスはその85パーセントを10万3千冊に使っている。こう言えばもうわかるんじゃないか？なあステイル」

3人がステイルを一斉に見つめる。どうやらステイルは理解したらしい。

「なるほど。15パーセントといえど約27年分あると言うわけか。では何故インデックスは苦しんでいるんだ？」

「簡単なことだ。インデックスの中に約26年分を使うほどの他の何かがあるってことだが、俺にはここまでしかわからん。何か心当たりはないか？」

すると上条が急に何かを思い出したようだ。

「この前インデックスが大怪我した時になんかよくわからないけどインデックスじゃない何かが出てきたんだ。確かヨハネのなんたらとかって言ってたが・・・」

なるほど、なこれで大体わかった。やれやれ、今日はゆっくり休めそうにないぜ。

「おそらくそいつが原因だろう。何処かしらに魔術とやらをかけていたんだろう。インデックスがイギリス清教を裏切らないようにする措置だろうぜ。やれやれ、イギリス清教も落ちたものだな。こんな小さい少女を騙して利用するなんて」

それを聞いてステイルと神裂の2人は大きな衝撃を受けていた。自分達はずっと騙されていた。消さなくてもいい記憶をインデックスから奪っていた。その事にどうしようもない罪悪感を抱いていた。すると、その様子を見ていた承太郎が、

「おい、いつまでそうやって打ちひしがれているんだ？ 助けたいんじゃないのか？」

「・・・ああ、助けてい」

「それなら俺たちに協力しろ」

上条も2人に協力を求める。

「みんなが笑って終われる結末をずっと望んでたんだろ！ 力を貸してくれ！」

「わかりました」

「神裂！」

「やりましょうステイル。インデックスを助けるために」

その言葉を聞き、ステイルの心に火がついた。そういえば何年ぶりだろうか、神裂のこんな明るい顔を見たのは。

それは神裂も同じであった。ステイルのこんな明るい顔を見たのは何年ぶりか。そう考えていた。

魔術に詳しい2人が話し合った結果、彼女自身が見えるところに術を仕込むのは考えにくい。恐らくあるとすれば口の中であると言う結論に至った。しかしここで1つの問題が上がった。

どうやってこの術式を解くかである。インデックスを縛ると言うことは、そうのとうの魔術であることは確定である。ただこんな短い時間の中術式を解析するのは不可能である。

4人で考え込んでいると突然、上条が、

「俺にやらせてくれるかもしれない。俺の右手は異能の力なら神のご加護も消すことのできる幻想殺しがある。」

「なるほど！ 右手で術式に直接触れて解除すると言うわけか」

「よし！ 上条、頼む！」

インデックスは少し意識があるのか、真っ青な顔をしてとても不安そうな顔をしていたが、上条と承太郎の顔を見て安心したように微か

に微笑んだ。

インデックスはもう持たない！急がなければ！

まずは口の中を4人で確認する。予想は的中。インデックスの喉に術式が刻まれていた。

「よし、じゃあ行くぞ」

そう言つて上条はインデックスの喉にある術式目指して手を伸ばした。

「うっ！ううっ」

インデックスが苦しそうである。早く済まなければ。

「よし！とどい・・・」

そう上条が言いかけた途端か正体不明の衝撃波に4人は吹き飛ばされた。

「な、なんだ!?!?」

「警告。『首輪』の破壊を確認。再生不能。侵入者の迎撃を最優先とし、聖ジョージの聖域を発動します」

「おい、インデックス！くそっ。ステイルこれはどう言うことだ？」

「わからない！恐らくイギリス清教の上層部が保険として付けていたものだろう。くそー！」

「皆さん！あれを見て下さい！」

神裂がインデックスを指差す。なんとインデックスの前に2つの魔方陣が現れ、そこから空間が割れてきていた。

その様子を見て承太郎がすぐさまさま動かな出した。

「上条！インデックスのとこまで行くぞ！恐らくもう一度インデックスに右手で触れれば何かが起こるかもしれない」

「わかった！で、戦法は？」

「いつものやつだぜ！俺が時を止めてる間にインデックスの所へ！ステイルと神裂は援護を頼む！」

「わかった！」

「わかりました！」

「よし！じゃあ行くぞ！スタープラチナ・ザ・ワールド」
時を止める。あと5秒！

「上条！行けええ！」

上条がインデックスの元へ向かう。だがしかし承太郎はなぜか違和感を覚えた。

あと4秒。

「……章……節スタンド能力による時間停止と確認」

なんとインデックスが止まった時の中で動き出したのである。

あと3秒。

「まずい！上条、一旦戻れ！」

「え？」

「時間停止能力を有する『空条承太郎』の排除を最優先とする」

上条が急いで引き返す。

あと2秒。

「何かやばい！スタープラチナ！」

スタープラチナで防御を固める承太郎。上条も右手を構え備える。

インデックスから何か光線のようなものが出てきた。

あと1秒。

その光線は承太郎に直撃した。

「くっそ！なんてパワー!?？」

「承太郎——！」

スタープラチナで弾いたものの、かなりの衝撃があり承太郎は吹き飛ばされた。それと同時に時間停止が解除された。

吹き飛んでドアにぶち当たる承太郎。

ステイルと神裂は理解できなかった。承太郎が時間停止能力を使えることは聞いていたが、何故吹き飛ばされたのか？

『空条承太郎』の排除を確認。これより第2目標『幻想殺し』の排除をする」

しかし2人は承太郎を吹き飛ばした魔術に心当たりがあった。

「竜王の殺息だと!?？バカな!?？」

「上条当麻、気をつけてください！この攻撃は『竜王の殺息』。伝説にあり聖ジョージのドラゴンの1撃と同義です。余波の『光の羽』が当たっただけでも危険です！」

上条に向かつて承太郎を仕留めたのと同じ光線が向かう。辛うじて右手で防いだものの、動けなかった。

「くっそ！」

「Fortis931」

「Salvare000」

2人が魔法名を名乗り上条を援護する。

「行け！上条当麻！」

「私たちが引きつけます。行ってください」

「すまない。ステイル、神裂！」

しかし、そうは言われたものの、2人は押され気味でインデックスに近づく隙がない。くっそ！ここまでなのかい？

上条がそう考えたその時後ろから聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「おい、上条。道つてのはな自分で切り開くものなんだぜ……。スタープラチナ！」

「承太郎！」

そこには承太郎が居た。傷だらけで立ってるのがやつとと言う状況だ。

よく見ると、承太郎は本を持っていた。なるほどそれを投げて気を逸らさせるわけか。

「こいつをインデックスの足元に投げて隙を作る。上条は俺が投げた瞬間にインデックスに向かつて走れ！」

「ああ分かった！」

「行くぞ！オラア」

承太郎が本を投げる。

「行け、上条！右手でその幻想をぶち壊せ！道を切り開け！」

「うおおおおお！」

上条が、インデックスの元へ向かう。しかし後ろから血を吐いた音が聞こえてきた。さらに本の軌道もインデックスの遥か頭上にズレていた。

「承た……」

「構うな！前へ進め！」

上条は承太郎を信じ前へ進んだ。インデックスの元へ。

「うおおおおお！」

ステイルと神裂もインデックスに吹き飛ばされた。

上条はインデックスの元へ急ぐ。しかし、インデックスと目が合っ
てしまった。

しまったやられる！

そう思ったその時、インデックスが突然倒れた。なんと足元には承
太郎が投げた本が転がっていた。

承太郎はふところに真っ直ぐ投げると防がれると言う懸念があっ
たので天井に当てその反射を利用し、インデックスの足元に当てた。

「上条今だ！」

もし、この世界に神様が作った奇跡の通りにうごいているってんな
ら

「まずはその幻想をぶち壊す!!?」

上条の右手がインデックスに触れる。すると割れる音がし、魔方陣
がガラスが割れたように崩れ去った。

『首輪』致命的な破壊・・・再生ふ・・・か・・・」

そう言っつてインデックスは倒れこむ。すぐさま上条が駆け寄る。
どうやら意識は微かにあるようだ。彼女の顔は笑顔に満ちている。

「よかった。インデックスが無事で」

皆がホッとした瞬間悲劇が起きた。インデックスの攻撃の影響で
発生した『光の羽』がインデックスの元へ降り注いでいた。

「上条！早く右手で羽を消せ！」

承太郎の警告虚しく羽は既にインデックスの目の前まで来ている。

もう右手をかざしても間に合わない。承太郎が最後の力を使い時間停止をしようとした時、上条が動いた。

「うおー！」

なんと上条が自分の頭で羽を受け止めたのである。光の羽のダメージにより倒れこむ上条。そしてその様子を間近で見たインデックス。

「とうまあああああああ！」

あれから1週間後・・・

親愛なる上条当麻。空条承太郎。とりあえず手伝ってもらった礼儀としてインデックスを取り巻く環境について説明しておくよ。あとで貸し借り言われても困るしな。あの子の記憶については特に問題なさそうだ。

『首輪』が外れた件で上が下した判断は『大至急連れ戻せ』・・・かな、表向きは。

実際は様子見という所だろう。なぜそんな寛大な処置に落ち着いたかは分からないがしばらくはあの子のしたいようにさせておく。

僕個人としては一瞬一秒でも君の側に居ることがゆるせないんだけど、あの子は10万3千冊の魔道書を用いて魔術を使った。自動書記が破壊された今あの子は自分の意思で魔術を使えるか、否か。

ありえないとは思うけど万が一の場合には僕達も体制を整えなければいけない。10万3千冊を操れる『魔神』つてのはそれだけ危険なことだ。

「だよ。上条？」

「ああ、ありがとう。承太郎。」

「しかしてめえ本当に・・・」

承太郎がそう言いかけた時にインデックスが入って来た。

「あ、あの。とうま？」

「あ、はいそうですよ。確かインデックスさんでしたよね？」

そう言うのとインデックスの目に涙が浮かび上がって来た。

「おい、上条。もういいんじゃないか？」

「ああーいやー、芝居つてのは疲れるなー」

「え・・・？」

「インデックス。俺が脳に受けたのは魔術によるダメージだろ？ならこの右手で無効にできたってわけ」

「すまんインデックス。上条がどうしてもやりたいつて言うもんな」

話を聞いていたインデックスの顔がだんだんと険しくなってきた。

「とーうーまー？何か言い残すことはある？」

「へっ？」

ガブリ

上条にインデックスが噛み付いた。病室に上条の悲鳴が響き渡った。インデックスは怒りのあまり病室から飛び出す。

「上条。これで本当に良かったのか？ほんとは何も覚えてないんだろ？」

「ああ。全く覚えてない。だけど彼女だけは泣かしちやダメな気がするんだ・・・。案外残ってるのかもな。思い出。」

「何処にだ？」

「決まってるだろ『心』にだよ」

「やれやれ、記憶が無くてもお前はやっぱり上条当麻だな」
帰ってきたのである。笑って暮らせる日常が。

第一部禁書目録編 完

To be continued↓

第2部 妹達編
11話 御坂妹

第2部 妹達編

インデックスとの戦闘より2週間が経過したある日・・・

理解できない。私は実験のために生み出され、実験のために死ぬ定めだ。なのになぜ、お姉さまは9982号の死に驚き、怒り、悲しんだのか、ミサカ9997号には理解が出来ない。しかも、なぜ9982号は・・・

死にたくない、と思ったのだろう

しかし、時は残酷に過ぎ、第9997次実験が始まろうとしていた。「ミサカ9997号は、これより実験を開始しますとミサカは考え事をやめて、冷静に告げます」

彼女はスナイパーライフルを構えて、白髪の少年に向けて放った。

そしてその夜ミサカ9997号は死んだ。

同時刻、空条家

ボン

承太郎の家の中に爆発音が響き渡った。

「おいインデックス！また電子レンジ壊しやがったな！！？」

「ち、違うんだよ。インデックスは卵を温めただけだよ」

やれやれ。承太郎はため息をついた。インデックスとの戦闘から1週間後、2人は晴れて退院することができたのだがその翌日、ステイル口車に乗り、上条が承太郎に内緒で姫神という少女を助けに行き、右腕を切断する重傷を負って帰ってきた。おかげでまた上条は入院。インデックスの面倒は承太郎が見ている。しかし、インデックスは家事の「か」の字すら知らず、料理を任せれば必ず何かが爆発するのであった。ついでにさつき爆発した電子レンジは5台目である。

「やれやれ、これから作り直すのも面倒だからファミレスで済ませるか」

「ファミレス！！？やったー！」

子供のように喜ぶインデックス。しかし、承太郎の財布は喜んではいなかった。

それから数時間後、辺りはもうすっかり暗くなっていた。承太郎とインデックスは帰宅の途中であった。

「あー、お腹いっぱい。久しぶりにこんなに食べたんだよ。ん？承太郎、どうしたの？」

「やれやれ、テメーとはもう二度とファミレスに行かねえ」

「えー！何で？」

「やかましい！ファミレスで食べただけなのに、何だこの金額は？テメーはジャンプに出てくるどこぞのサイヤ人か！」

そんな事を言っていると、承太郎はある人物とすれ違う。

御坂美琴である。しかし、様子が少しおかしかった。いつもの御坂なら、挨拶ぐらいはするはずなのに承太郎を見かけても全く反応がない。しかも変なゴーグルを掛けている。違和感を覚えた承太郎は声をかけてみることにした。

「ねー、承太郎。聞いてるのー？」

「インデックス。少し静かにしてろ。おい、御坂」
すると

「ミサカのことを呼びましたか？とミサカは不審な人物に警戒しつつ答えます」

承太郎は確かにこの人物が御坂と名乗ったのを聞いた。しかし、謎はさらに深まる。話し方から察するに性格は本物の御坂と真逆であることから、少なくとも御坂美琴本人ではないことがわかった。そこで御坂美琴の兄弟か親戚かとも思ったが、御坂美琴には兄弟はおらず親戚も学園都市には1人も来ていないという話を以前聞いていたため、少なくとも兄弟や親戚ではない。では一体今日の前にいる人物は何者なのか。承太郎は確かな情報を掴むため御坂にそっくりな人物に質問をした。

「おい、テメーは何者だ？」

「ミサカは、御坂美琴お姉様の妹です。とミサカは以前警戒しつつ答えます」

「だがそのお前の言う御坂美琴は妹は居ないと以前言ってたが？」

「ミサカはれっきとした御坂美琴お姉様の妹です！とミサカは告げます」

このままだと何処までも平行線か。インデックスもいることだし、今日はこの辺りにしておくか。

「分った。おい、インデックス。帰るぞ。」

「え、あつ待ってよー、承太郎ー！」

「最後にもう一度だけ聞くが、本当に御坂美琴の妹なんだな」

「はい！とミサカは自信満々に告げます」

「そうか、じゃあな御坂の妹。気をつけて帰れよ。あと、お前の姉によろしくな」

「はい。さようなら」

しかし、ミサカの表情はどこか複雑そうな様子だった。

承太郎達が去った後、ミサカは一人で呟いた。

「ミサカ100001号よりミサカネットワークへ。御坂美琴お姉様の知り合いらしき人物と接触。少し感づいた様子でありましたが、ミサカ100001号は実験の時間のため対応ができませんでした。あの人物との接触は避けることをミサカ100001号は勧めます」

『了解。とミサカは告げます』

今稼働している全てのミサカから返信が来た。

彼女達はシスターズ（妹達）。ある男を最強へとするだけのために作られた存在。御坂美琴の劣化クローンである。

ミサカ100001号は実験のためある少年の元へと向かった。

ミサカ100001号は学園都市中心部から離れた工場跡地へと来ていた。

「実験開始まであと1分となりました。準備はよろしいですか？とミサカは問いかけます」

「あ？準備なんていつでもできてるっての。早くだるいから始めようぜ」

「時間になりました。これより第100001次実験を開始します」

実験を開始を告げると同時にミサカ100001号は目の前にいる白髪の少年に対し銃を放った。しかし、これまでの実験でこの少年にバリアのようなものがあることは分かっている。しかし、超能力であるからには限界はある。そこでミサカ100001号が考えた作戦。

『一点集中攻撃』

「いくらバリアといえども、これだけ同じ箇所を集中的に攻撃すれば演算は間に合わないはず。とミサカは・・・」

しかし、ミサカ10001号が放った弾丸は全て帰って来た。慌てて回避するも左胸と左肩に2発ほど命中した。御坂美琴と同じ常盤台の制服が赤色へと染まる。左の肺を撃ち抜かれたのか、息が苦しい。

「なーんだ。結局、俺の能力のこと全然分かってないんじゃない」

胸が苦しく言葉を返すことすらできない。

「もう終わりか？チツつまんねえなー。まあいいや、楽にしてやんよ」
殺される。ミサカ10001号は薄れる意識の中で覚悟を決めた。

しかし、その時不思議なことが起きた。地面に転がっていたのだが気がついたら男に抱えられていた。よく見ると先ほど話していた巨大な男だ。その男は白髪の少年に詰め寄る。

「テメーなにやってやがる」

「あ？」

「なにをやってるかって聞いてんだ！」

それは全身全霊の怒りだった。

To be continued↓